

## 論文

## 親の幼児への抱きしめ行動が対児感情に与える影響(2)

権田 あずさ<sup>1)</sup>

キーワード：対児感情，身体接触，親子，幼児期

## 1. 研究の背景と目的

乳幼児期の親子の間で交わされる相互交渉の中でも、特に身体接触は、親子の絆を深め、親と子の相互が愛着を形成していく上で重要な役割を果たすことが明らかにされている。とりわけ「抱きしめる」という行為は、親が我が子を大切に思う気持ちを表現するための行為として用いやすく、同時に子どもにとっても親に受け止めてもらえている、大事にされていると感じやすいため、親からの抱きしめが愛情表現として果たす役割は大きいと考えられる。鎌田(2017)は、乳幼児期のうち、特に低年齢期には「だっこ」が多いが、子どもの成長に伴って「抱きしめる」行動が増加すること、また、子どもが寂しそうなきや、怖がっているときによく用いられることを明らかにしている。また、Yoshida, Kawahara, Sasatani, Kiyono, Kobayashi, & Funato (2020)は、異なる強さの抱きへの心拍間隔変化を調べることで、「可愛いと思ってぎゅっと抱きしめる」ことによって乳児がリラックスすることや、抱きしめを行うことで父親と母親も心拍間隔の増加率が高まり、リラックスすることを報告している。

親子間の身体接触の意義や効果については、子どもへの影響という側面と、親にもたらす効果といった側面から、これまで数多くの報告がなされてきた(例えば、山口, 2003; 藤田, 2012; 赤上・加納, 2012; 渡辺, 2013 など)。しかしながら、これら先行研究の多くは母子、特に乳幼児期の子どもとその母親を対象としたものであり、父子間や、幼児期の親子の間で交わされる身体接触の実態やその効果については、知見の蓄積が十分になされてきたとは言いがたい。また、親子の心的交流や愛情表現として、身体接触を取り上げたものも数が少ないのが現状である。

前回の調査(権田, 2021)では、3歳から5歳の幼稚園児をもつ親の、抱きしめを含む日常的な身体接触の程度や、親が子どもを抱きしめるという行為を実験的に繰り返すことで、子どもに対するイメージに変化が見られるかどうかを検証した。本研究では、先述したような対児感情の変化を捉えるとともに、幼稚園児をもつ親と、保育園児をもつ親との比較を行い、保護者の就業形態の違いによって、子どもに対する日常の身体接触の程度や、抱きしめ実施実験による対児感情得点に違いが見られるかどうかを検証することを目的とした。

---

<sup>1)</sup> 山陽学園短期大学こども育成学科

## 2. 研究方法

### 1) 調査対象者

調査対象者は、岡山市内にある A 保育所の園児とその保護者であった。A 保育所には、0 歳から 6 歳の乳幼児が在籍していたが、幼稚園との比較を可能とするため、年長クラス、年中クラス、年少クラスに属する園児とその保護者を対象とした。また、父親と母親の比較が可能となるように、各年齢のクラスの内、半数は父親に、残りの半数は母親に協力を依頼した。具体的には、年長組 25 名（父親 12 名、母親 13 名）、年中組 29 名（父親 14 名、母親 15 名）、年少組 18 名（父親 9 名、母親 9 名）に研究依頼を行った。なお、調査対象としたクラスにきょうだいがある場合は、上の年齢の園児とその保護者を対象とした。

### 2) 研究の手続き

本研究の手続きについては、今川ら（2007, 2008）および権田（2021）に従った。以下が本研究の手続きの概要である。

- (1) 日常の親子の関わりと、日常場面における子どもへの身体接触に関する質問紙調査
- (2) 対児感情評定尺度（花沢, 1992）の実施
- (3) 抱きしめ実施実験

対児感情評定尺度で得られたデータは得点化したのち、対応のある  $t$  検定を実施し、抱きしめ実験前後の対児感情の変化を検証することとした。

なお、本研究は、山陽学園短期大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した(承認番号 2021C001)。

### 3) 調査および実験の日程

本研究では、匿名性を保ちつつ、児の年齢および性別、保護者の性別による比較を可能とするため、研究依頼書をはじめとする調査用紙等の書類は、一式をまとめて配布した。書類一式は、2022 年 12 月 5 日に配布し、質問紙調査と 1 回目の対児感情評定尺度票は 2022 年 12 月 9 日に回収した。抱きしめ実施実験を 12 月 9 日から 12 月 18 日の 10 日間にわたって行った後、12 月 23 日に 2 回目の対児感情評定尺度調査票を回収した。さらに、抱きしめ効果の安定性を確認するために、3 回目の対児感情評定尺度票を 1 月 20 日に回収依頼した。

## 3. 結果と考察

研究依頼をした対象者のうち、20 名（父親 6 名・母親 14 名）から研究への同意が得られた。抱きしめ実施実験前後の対児感情得点を比較するにあたっては、抱きしめ前後の対児感情評定尺度票への回答があった 9 名（父親 3 名、母親 6 名）を分析対象とした。なお、保育所と幼稚園との比較に際しては、幼稚園の父母を対象とした調査結果（権田, 2021）を用いることとする。

### 1) 父母の児との日常的な身体接触-保育所と幼稚園-

図 1 に、保育所の父母の児との日常的な身体接触についての結果を、また、図 2 に幼稚園の父母の児との日常的な身体接触についての結果を示す。図 1 より、保育所の父母が日常的に行う身体接触行動として頻度の高かったものは、「手をにぎる」、「ほおや顔をなでる」、「からだを抱きしめる」などであった。一方で、「お馬さんごっこをする」、「肩ぐるま

をする」といった身体接触行動は頻度が低かった。各身体接触行動の表出の仕方は、保育所の父母と幼稚園の父母とで類似していたことから、3歳以上の幼児をもつ親は、「手をにぎる」、「ほおや顔をなでる」、「からだをだきしめる」などの身体接触行動を日常的によく行う一方で、「お馬さんごっこをする」、「肩ぐるまをする」といった身体接触行動は、日常的にはあまり行っていないことが明らかとなった。また、日常的な身体接触行動の頻度は、保育所の父母よりも幼稚園の父母の方が高い傾向があった。

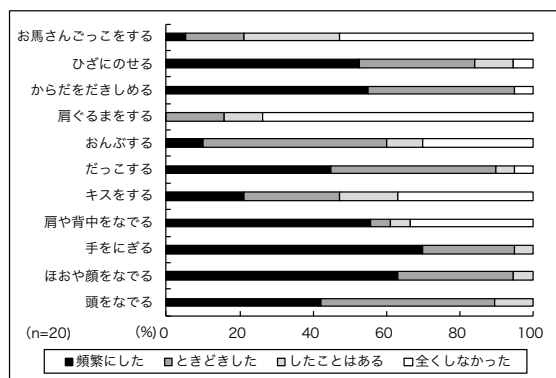


図 1 保育所父母の児に対する日常的な身体接触

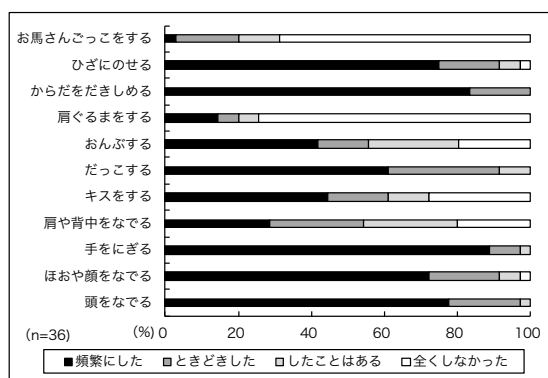


図 2 幼稚園父母の児に対する日常的な身体接触

保育所の父母の児との日常的な身体接触について、父親と母親別に図 3 と図 4 に示す。図より、多くの身体接触行動について、父親よりも母親の頻度が高いことが明らかとなった。幼稚園の父親の児との日常的な身体接触は、母親よりも頻度が高かった(権田, 2021)ことから、先に見た保育所の父母の日常的な身体接触の低さは、保育所の父親の日常的な身体接触頻度の低さが関係していることが伺えた。「からだをだきしめる」を見ると、幼稚園の父親や母親よりも頻度は低いものの、「頻繁にした」と回答した父親も見られ、「全くしなかった」と回答した割合も、他の身体接触行動と比べて低かった。このことから、幼稚園の父母と同様に、本研究で対象とした保育所の父母においても、子どもを抱きしめることは、親の性別に関わらず日常的に行われる身体接触行動のひとつであることが伺えた。

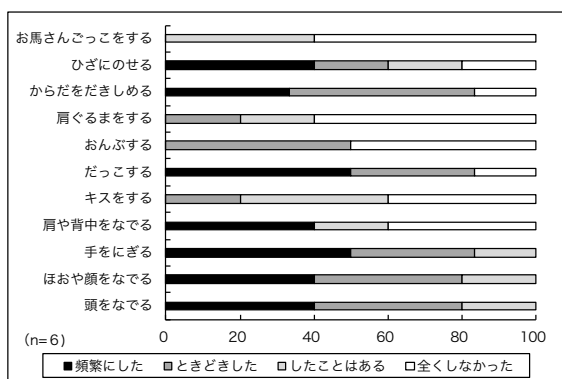


図 3 保育所の父親の児に対する日常的な身体接触

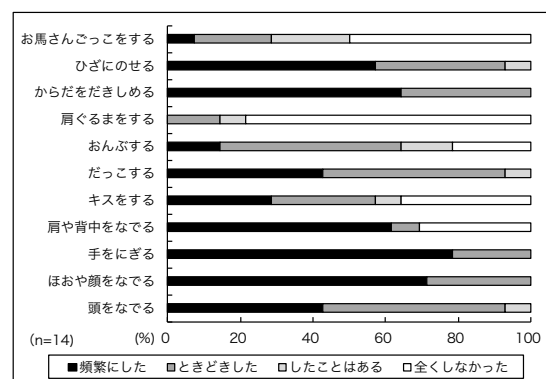


図 4 保育所の母親の児に対する日常的な身体接触

保育所の父母の男児との日常的な身体接触を図 5 に、保育所の父母の女児との日常的な身体接触を図 6 に示す。ほとんどの身体接触行動について、男児よりも女児に頻繁に行われていることが明らかとなった。「お馬さんごっこをする」は、「頻繁にした」と回答した

女兒の父母がいたものの、「全くしなかった」と回答している父母もいたことから、肩ぐるまやお馬さんごっこ、だっこといった子どもの身体全体を支えるような身体接触は、女兒よりも男児に対して行われやすい行動であることが示唆された。

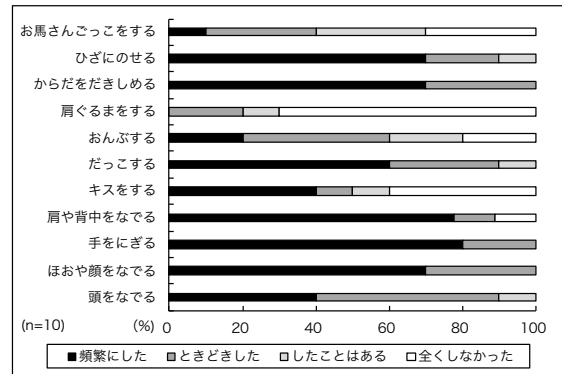
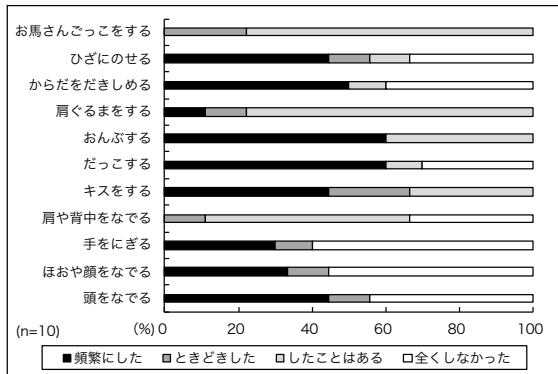


図5 保育所の父母の男児に対する日常的な身体接触 図6 保育所の父母の女兒に対する日常的な身体接触

## 2) 抱きしめの実施状況

父親と母親が10日間の抱きしめをどの程度実施できたかについて、その結果を図7に示す。保育所の父母は、幼稚園の父母と比較して抱きしめ実施実験への参加数が少なく、特に保育所の父親の参加者は極めて少なかった。保育所の母親の中に、「あまりできなかった」と回答した母親がいたが、これについて「下の子に手がかり、(抱きしめ対象の)上の子が後回しになってしまう」ことが理由として挙げられていた。今川ら(2008)が実施した際にも、同様の理由で、子への抱きしめを行えなかった母親がいたことが報告されていることから、きょうだいの有無は親子の関わりに影響することが示された。

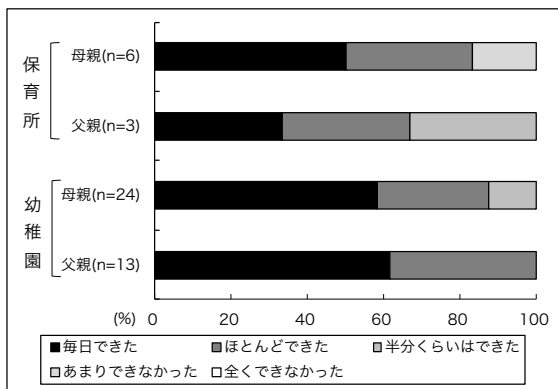


図7 父親と母親の抱きしめ実施状況

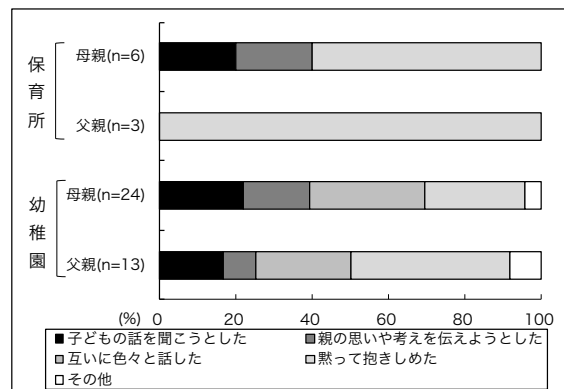


図8 抱きしめ中の父親と母親の様子

抱きしめ実施実験中の父親と母親の様子について図8に示す。「黙って抱きしめた」と回答した保育所の父親は100%であり、この回答は幼稚園の父親においても割合が高かった。さらに、保育所の母親についても、「黙って抱きしめた」と回答した割合が、幼稚園の母親よりも高かった。本実験では、抱きしめる際に児が就寝していた場合は、寝ている児を抱きしめるよう依頼していた。父親や母親がフルタイムで就業している場合、児が起床している時間に帰宅できなかつたり、起床している時間に子どもを抱きしめる時間的・精神的な余裕がなかつたりしたことがこの結果に関係したと考えられた。抱きしめ中の様子とし

て、「子どもの話を聞こうとした」と回答した割合は、保育所と幼稚園のいずれにおいても、父親よりも母親に高かった。

### 3) 父母の対児感情と抱きしめによる対児感情得点の変化

10 日間の抱きしめ実施前後における父母の対児感情および拮抗指数の変化を、保育所と幼稚園別に図 9 と図 10 に示す。抱きしめ前の接近得点の平均は、保育所 (n=9) と幼稚園 (n=37) の父母それぞれ、42.3 点 (SD=7.80) と 42.2 点 (SD=4.66)、回避得点の平均は、11.6 点 (SD=7.36) と 11.1 点 (SD=7.83) であった。このことから、親の就業形態に関係なく、幼児をもつ親の対児感情得点は、ある一定の水準にあることが明らかとなった。その一方で、今川ら (2007) の幼稚園での調査では、抱きしめ前の父親の接近得点の平均は 33.3 点、母親では 36.8 点であったと報告されており、本研究で対象とした父母は、子どもに対する肯定的な気持ち強い父母であった可能性も示唆された。

幼稚園の父母と同様に、10 日間の抱きしめによって、保育所の父母の児に対する対児感情得点には顕著な変化は認められなかった (接近:  $t(9)=0.16, p=.879$ , 回避:  $t(9)=0.61, p=.559$ )。

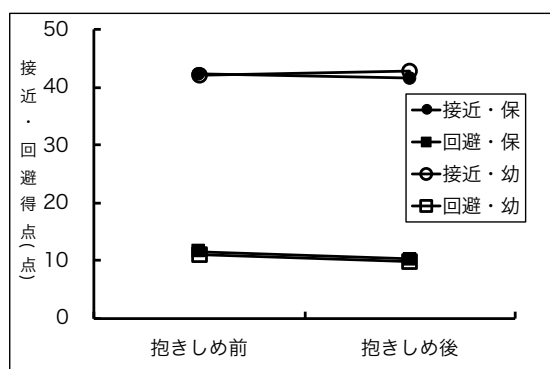


図 9 幼保別の抱きしめ実施前後の対児感情変化

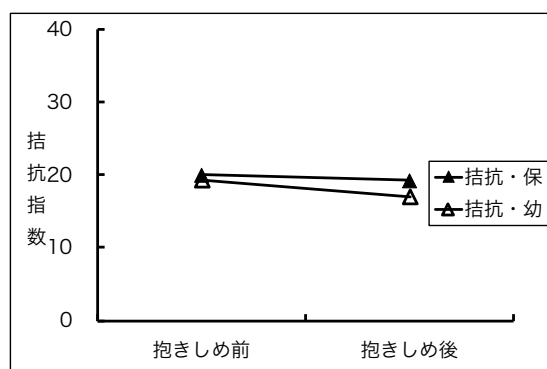


図 10 幼保別の抱きしめ実施前後の拮抗指数変化

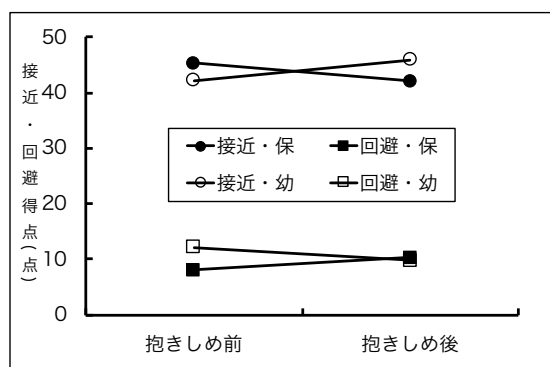


図 11 父親の抱きしめ実施前後の対児感情変化

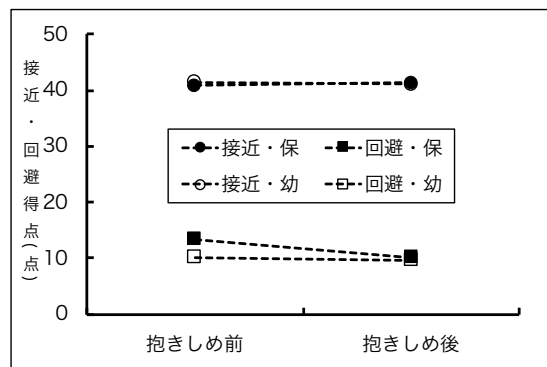


図 12 母親の抱きしめ実施前後の対児感情変化

10 日間の抱きしめ実施前後における父親の対児感情の変化を図 11 に示す。10 日間の抱きしめによって、保育所の父親の児に対する接近得点には低下が見られ、回避得点には上昇が見られたが有意な差は認められなかった (接近:  $t(3)=0.52, p=.656$ , 回避:  $t(3)=0.534, p=.647$ )。

抱きしめ実施前後における母親の対児感情の変化を図 12 に示す。児を抱きしめること



によって、保育所の母親の児に対する接近得点には上昇が見られ、回避得点には低下が見られたが、有意な変化は認められなかった（接近： $t(6)=1.36$ ,  $p=.239$ , 回避： $t(6)=1.26$ ,  $p=.263$ ）。

#### 4. 総括と今後の課題

質問紙調査にて、親子の日常的な身体接触の様子を尋ねた結果、本研究で対象とした保育所の父母は、「手をにぎる」、「ほおや顔をなでる」などの身体接触行動を日常的に行っていたことが明らかとなった。これは、幼稚園の父母でも同様の傾向であった。とりわけ、本研究で着目した「からだをだきしめる」行動も、他の身体接触行動と同様に日常的に行われる身体接触行動のひとつであった。乳幼児に対する保護者の身体接触の程度を調査した鎌田（2017）も、15種類の身体接触行動のうち、「抱きしめる」行動が最もよく行われていたことを報告している。子どもの性別によって、父母の身体接触行動の表出に違いが見られるかを検証した結果、女兒の父母は男児の父母よりも頻繁に身体的接触を行っていたことが明らかとなった。ただし、肩ぐるまやお馬さんごっこなどのような、子どもの身体全体を支える必要のある身体接触行動については、頻度は低いながらも、女兒よりも男児に向けられやすい行動であることがわかった。これらの身体接触行動を、女兒よりも男児が好み、父親が男児の求めに応じた形で行われたとも考えられるため、今後は、親子のどちらの働きかけによって身体接触が生じたのかについても検討する必要があるだろう。また、これまでの調査も含めて、親や子の性別に見た身体接触の表出の傾向には一貫性が認められないため、更なる検証が必要である。

10日間の抱きしめ実施実験前後における、保育所の父母の対児感情得点の変化に、有意な差は認められなかった。これについては、本研究で対象とした父母の接近得点が、過去の調査と比較して高い傾向にあり、そもそも子どもに対する肯定的な感情が強い父母たちであったことが関係していると考えられた。また、子どもを抱きしめることを日常的に行っている父母であり、本研究の父母にとって、子どもを抱きしめる行動が特別な行動ではなかったことも関係しているかもしれない。今川ら（2008）も、日常的にあまり抱きしめを行わない父母を抽出して分析した結果、それらの父母に、抱きしめの効果と推量される接近得点の上昇と回避得点の低下が見られたことを報告している。一方で、日常的に我が子を抱きしめている父親であっても、意識的に男児を抱きしめることで、父親の男児に対する否定的な感情が抑制される可能性が指摘されている（権田, 2021）が、本稿では、子どもの性別による分析を十分に行うことができなかった。抱きしめが親の対児感情に与える影響については、父親と母親との比較や、児の性別や年齢による比較が可能となる被験者数を確保した上で、日常的な抱きしめ行動の頻度の違いによる効果を検証する必要があるだろう。

#### 謝 辞

本研究にご協力いただいた A 保育所の先生方ならびに園児のみなさんと保護者の皆様に心より御礼申し上げます。

## 付 記

本研究は、令和3年度山陽学園大学・短期大学学内研究補助金の助成を受けて実施したものである。

## 引用・参考文献

- 赤上涼子・加納尚美(2012). ベビーマッサージが母親の育児に及ぼす効果について. 茨城県母性衛生学会誌, 30: 68-73.
- 藤田文(2012). 子ども時代の身体接触と大学生の対人関係との関連. 大分県立芸術文化短期大学研究紀要, 50: 81-93.
- 権田あずさ(2021). 親の幼児への抱きしめ行動が対児感情に与える影響. 山陽論叢, 28: 155-160.
- H.F ハーロウ(訳)浜田寿美男 (1978). 愛のなりたち. 京都: ミネルヴァ書房.
- 花沢成一(1992). 母性心理学. 東京: 医学書院.
- 今川真治・山元隆春・財満由美子・林よし恵・三宅瑞穂・落合さゆり(2007). 「抱きしめる」ことが親の子に対するイメージと子どもの行動に与える影響に関する研究(1). 広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要, 36: 415-423.
- 今川真治・山元隆春・財満由美子・林よし恵・上松由美子・松本信吾・(協力者)松浦あずさ(2008). 「抱きしめる」ことが親の子に対するイメージに与える影響に関する研究(2). 広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要, 37: 253-258.
- 鎌田桃代(2017). 保護者の乳幼児に対する身体接触に関する調査研究. 愛知教育大学幼児教育研究, 19: 29-37.
- Sachine Yoshida, Yoshihiro Kawahara, Takuya Sasatani, Ken Kiyono, Yo Kobayashi, Hiromasa Funato. (2020). Infants show physiological responses specific to parental hugs. *iScience*, 23(4).
- 渡辺香織(2013). タッチケアが産後1～2ヵ月の母親の愛着・育児不安・母子相互作用に及ぼす影響. 母性衛生, 54(1): 61-68.
- 山口創(2003). 乳児期における母子の身体接触が将来の攻撃性に及ぼす影響. 健康心理学研究, 16(2): 60-67.